

## はじめに

1952（昭和 27）年、洋画家・佐藤敬は、単身フランスへと渡り、以後、同地を拠点に活動した。滞欧期の佐藤の生活や制作について、自伝である『遙かなる時間の抽象』（アドバンス大分、1979 年）などの資料からある程度の状況を掴むことができる。本論は、滞欧期に佐藤が家族に宛てた手紙から、当時の制作や交友関係について詳細を明らかにし、佐藤の画業における滞欧の意義を見出すことを目的とする。なお、本論では 1950 年代に焦点を絞り、1960 年代、1970 年代については論をあらためることとする。

## 第1節 佐藤敬の 1950 年代概略

1952（昭和 27）年、佐藤敬は日本を発った。当時、いまだ日本人一般旅行者の海外渡航は難しく、佐藤の渡航は朝日新聞特派員としてのものであった。戦時中、佐藤は朝日新聞の従軍画家として従軍したほか、戦後も朝日新聞の挿絵や週刊朝日の表紙を手掛けるなど、朝日新聞記者や編集長と親交があった。そのような縁で佐藤は朝日新聞特派員として渡航する機会を得た。朝日新聞との話し合いで、佐藤は中欧、北アフリカの旅行を絵と文にして送ることになっていた<sup>1</sup>。そのため、1952 年 5 月には中欧へ、10 月にはアフリカへ取材旅行に向かっている【年表 1】。1954（昭和 29）年、フランスでの初個展を開催したものの、それ以降の妻・美子宛の手紙には画室を持たずホテル暮らしのままの現状を懸念し、金策を相談する内容や制作について悩みを吐露する場面が目立つ<sup>2</sup>。しかし、1958

---

<sup>1</sup>佐藤敬『遙かなる時間の抽象』（アドバンス大分、1979 年）、254 頁

<sup>2</sup>「私は今にして思ふと巴里についてすぐ何故画室を買はなかったのだろうとつくづく後カイします。着きたてに方々あたって見て最小百万と云ふお金が〇〇にいる事を知ってすっかりあきらめたのがいけなかったのです。百万でもかかっておけば、その位は今のホテルにいても何年かのうちなしくずしに支払ふ事になるのです。（中略）然し何とかして安い画室を見つけたいと思つてみますが貸しアトリエの権利金二、三十万すら目下の所思ふように行かない有様ですから身動が出来ません。」（1954 年 11 月 20 日消印 美子宛手紙）「ホテルの支払いもたまってますしすべてが「屈辱」の生活で絵が描けません。こうした無理をして、巴里でがんばるのはただ絵の事だけですが、これも限度があるのではないのでしょうか。そこでこれをなんとか打解して兎も角絵が描ける生活の可能性を確立するために、美子にもう一骨折ってもらうかアレ・ルツルネーで一度帰るか（僕が帰ってもすぐ昔の様にお金が集ると軽く考えてはいませんが）どちらかです。」（1955 年 6 月 18 日消印 美子宛手紙）

(昭和 33) 年のサロン・ド・メ出品、それから 1959 (昭和 34) 年の個展開催のころより徐々に作品がフランスで認められたことを実感し、「今度の個展で初めてフランスの画家としての地位はできたとおもいます」という言葉を美子に伝えている<sup>3</sup>。以上のように佐藤の 1950 年代は、フランスで画家として活動していくため、苦悩しながらもその足場を固めた時期としてとらえられる【年表 2】。

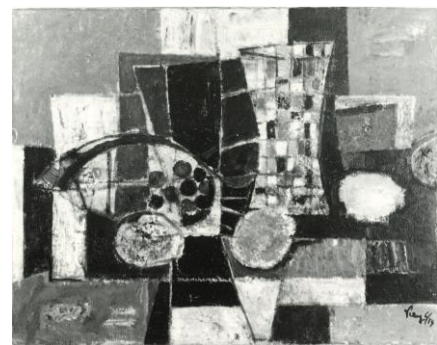
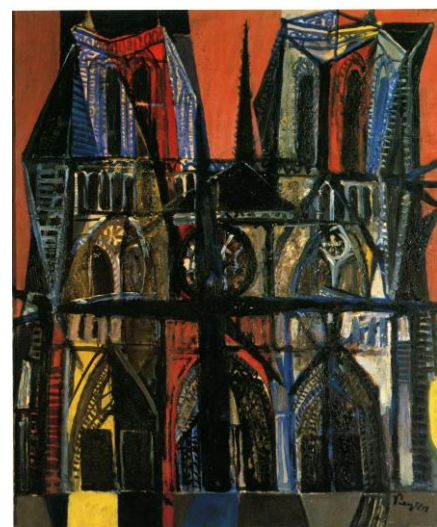
## 第2節 制作の変遷 — 転機としてのスペイン旅行

1950 年代の佐藤の展覧会出品については【年表 3】の通りである。出品作品の画像を確認できないものもあるが、ここでは現在確認できる画像と手紙の内容から佐藤の制作の変遷を整理する。

具体的な作品に基づいてみていく。当館に所蔵される《裸婦》(1952 年) は 1952 (昭和 27) 年第 1 回日本国際美術展に出品された。画面はステンドグラスを思わせるような色面で構成され、キュビズム風にいくつかの視点がとりいられている。画面の表面は、平面的に処理されている。

1950 年代前半の渡欧後の作品は現存が確認できるものが少ないが、神奈川県立近代美術館に所蔵される《赤いノートルダム》(1952 年) や《静物》(1954 年) などから、複数の視点を画面に導入し、色面とそれを分割する線によって具象的なモチーフが捉えられていることがわかる。1941 (昭和 16) 年創刊のフランスの日刊紙『combat』(1954 年 1 月 18 日号)【資料 1】に掲載が確認される 1954 (昭和 29) 年の初個展の出品作品は、白黒ではっきりしない部分はあるものの《静物》(1954 年) と同様の作風であることがうかがえる。このころの佐藤の作品は、《裸婦》(1952 年) と比較して抽象化が進んでいる一方で、具象的なモチーフを判別することができる。

そのような佐藤の画業の一つ目の重要な転換点として、1955 (昭和 30) 年のサロン・ド・メの出品作《パンチュール》(1955 年) を挙げたい。この作品には牛という具象的なモチーフが描かれているものの、画面の大部分は原始的な印象を与える黒い模様によって占められ、作品の抽象化がさらに進んでいることが確認できる。これ以降、《切線》(1956 年) のように、具象的なモチーフは完全に消失し、佐藤敬は抽象画家としての道を歩み始める。《パンチュール》について佐藤は美子宛の手紙に「サロン・ド・メイに出品する 50 号



上：《裸婦》1952 年、73×91 cm、大分市美術館蔵

中：《赤いノートルダム》1952 年、73×61 cm、神奈川県立近代美術館

下：《静物》1954 年、33×41 cm

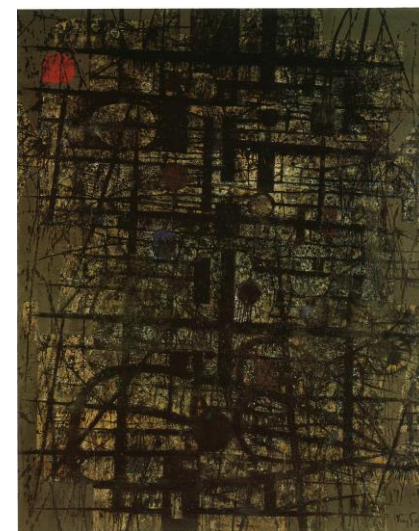
<sup>3</sup> 3 月 25 日消印 美子宛手紙

の作品にとりくみ 主題は闘牛を描いたものですが、パンチュールという題のほうがふさわしいほど抽象的になりました」と、作品の抽象化が進んでいることを伝えている。この作品は4月下旬に描かれたもので、その直前のスペイン旅行が発想源となったことが考えられる。この1955（昭和30）年のスペイン旅行は、佐藤と同じく新制作派協会に所属していた三岸節子（1905-1999）とその息子である黄太郎（1930-2009）の3人で、3月25日～4月19日の期間、旅したもの。佐藤は、3月中旬に三岸から誘いを受け、お金の目途がつけば決行したい旨を美子に手紙で伝えている。スペイン旅行の詳細については【年表4】の通りである。この中で筆者が目にしたのは、佐藤がこのスペイン旅行中、「2頭の牛」に出会っている点、すなわち闘牛と洞窟壁画に描かれる牛に出会っている点である。美子宛の手紙にもあるように《パンチュール》は闘牛を主題とした作品であり、スペインで見た闘牛がその発想源であることは間違いない。また佐藤は、「ピカソの生涯の今一つの絵画モチーフは闘牛です。（中略）画題としては尽くせぬ興味があり、私も1956年（ママ）に闘牛を主題とした作品を、サロン・ド・メイに出品しました。」と述べており、闘牛をピカソの重要なモチーフとしてとらえていることも重要である。

しかし、佐藤が牛を主題として選択したのには、闘牛だけがきっかけではないだろう。現在では芸術のはじまりとして語られることも多いラスコーの壁画のなかに牛をみたことも重要な意味を持ったと考えられる。佐藤は、下記のように述べており、この壁画を芸術の根源としてとらえていることがわかる。

ラスコーの岩窟に有史以前の洞窟画を見に行った この洞窟画は紀元前15000年ここにある それが硝子状に結晶している 牛、鳥、鹿などが白い岩肌に黒、青、赤茶で素朴な形と色が芸術の根源を示している

また、ここで「硝子状に結晶している」という発言は、佐藤の次の展開も予感させる。すなわち、絵の具を厚塗りし、佐藤本人が「絵具の厚さが岩肌のようになった」「焼き物の肌のようになった」と述べる《大地凝結》（1958年）のような作品である。本作は、1958（昭和33）年サロン・ド・メの出品作品で、手紙からマチエールへの関心が感じられる点で1950年代の制作における二つ目の



上：《パンチュール》1955年、90.9×116.7 cm

下：《切線》1956年、146×116 cm、大分県立美術館

転換点といえる。それまでの佐藤のマチエールは、平面的で特に特徴があるものではない。しかし、現在実物を確認できない《パンチュール》(1952年)に関する今泉篤男氏の評論にも、「従来よりも一層抽象化の方向をたどり、同時にマティエールが複雑になつた」<sup>4</sup>とあり、この時期からマチエールへの関心が始まり《大地凝結》などへと展開したことがわかる。このように絵画のマチエールに関心を抱いたのは、洞窟画の物質性に触れたことがひとつのきっかけだったと考えられる。

以上のように 1950 年代の佐藤は、フランスで画家として活躍するために模索を重ねた。1950 年代前半には、色面とそれを分割するような線によって、多視点からモチーフをとらえたキュビズム風の絵画が描かれ、徐々に画面における線の主張が強まっていく。その後、格子状の線と円による作品が描かれるようになり、具象的なモチーフは消失する。さらに、線による表現が後退するとともにマチエールへの関心が強まる。以上のように展開する展覧会出品作品と並行して、販売用の絵画や挿絵を手掛け日本に送付しており、どんどん抽象的になっていく展覧会出品作品と、いわゆる売り絵との間の作風の矛盾に悩む様子も美子宛の手紙からうかがえる<sup>5</sup>。また、洞窟壁画からそのきっかけを得たものと考えられるマチエールへの関心は、1960 年代の佐藤に見いだされる日本の装飾古墳への関心へとつながってゆくものと考えられる。

### 第3節 交友関係

佐藤のフランスでの生活と制作は、新制作派協会の友人や現地に暮らす画家たちの交友に支えられていた。本節では、佐藤のフランスでの交友関係を整理する。

---

<sup>4</sup> 座右宝刊行会編『現代日本美術全集 第9巻』角川書店、1956年、80頁

<sup>5</sup> 「さて 大急ぎで十号を三枚描きました。ごらんの通り大甘巴里風景です。この便と同時に送るか目下今泉氏が来巴中で氏にイタクするかいずれにしても至急送ります。どうぞよろしく願います。これなら売るのが楽だと思いますが、描く方は少々心が苦しいのです。もう少しこれからからくしたいと思っております。」(1957年5月25日美子宛手紙)、「又何よりも今度は作品の質に重きをおくつもりです。今までの甘いお土産絵はやめます。と云って今描いてみるような純粹抽象作品でも困りましょうね。そこをどうするかと云ふのが目下最大の悩みです。」(1958年2月3日美子宛手紙)

### 〈新制作派協会の画家たちとの交友〉

佐藤も創設メンバーのひとりである新制作派協会の画家たちのなかには、佐藤以外にも戦後フランスに滞在した画家がいる。荻須高德（1901-86）は、1948（昭和 23）年、日本人画家として戦後最初にフランス入国を許可され渡航した人物である。荻須と佐藤は、同世代の新制作派協会創設メンバーであり深い交友関係にある。渡欧直後の連絡先として荻須の連絡先をかりているほか、夕飯をともにしたり、画室を借りる際に相談したりと、お互い気を許せる存在であったことがわかる。新制作派協会の画家は、ほかにも三岸節子（滞欧 1954-55、1968-89）とは前述のとおりスペインを旅しており、また、佐藤より若い世代である田淵安一（1921-2009、滞欧 1951-2009）とは、マッソール画廊でグループ展を開催。田淵、金山康喜（1926-59、滞欧 1951-59）、関口俊吾（1911-2002、滞欧 1935-41、1951-2002）、風間完（1919-2003、滞欧 1957-58、1967）とともにクリスマスをおくったことも美子宛の手紙からわかる。異国の地に単身過ごす佐藤にとって、なじみ深い新制作派の画家たちはよき相談相手であり、気を許せる重要な存在であった。

### 〈現地の画家たちとの交友〉

フランスでの佐藤の交友は、日本人画家のみにとどまらない。渡欧当初にたずねたピカソ（1881-1973）やマチス（1869-1954）は、憧れの存在であり、もちろん重要な存在ではあるが、より親しい存在として手紙によく名前が挙がるのが、アベル・レ・フェノザ（1899-1988）とアントニオ・クラベ（1913-2005）である。フェノザは、スペインのバルセロナに生まれた彫刻家で、ピカソの後援によってパリの美術界の仲間入りをした。クラベもバルセロナに生まれた洋画家。二人は第 1 回の個展にも顔を出し、佐藤がスペイン旅行へ行った際は、現地の画家たちに手紙を出して佐藤が彼らと交流できるようアレンジしている。また、フェノザがルーアン美術館の館長を紹介したことで展覧会出品が決まるなど、制作の上でも重要な役割を果たしている。佐藤も二人を日本の美術雑誌で紹介しているほか、フェノザが欲しいといったニコンのカメラを郵送するよう美子に依頼するなど二人の活動を応援する様子が見える。フランスで画家として活動する地盤を築こうとする佐藤敬にとって、二人の友人は制作に刺激を与える存在であるとともに、異国における人的ネットワークを拡充するうえでも重要な存在であったといえ

よう。

### 〈日本の知人たち〉

1950年代の佐藤の手紙のなかには、フランスの佐藤を訪れる日本の知人たちの名前を確認できる。美術評論家・美術史家である今泉篤男（1902-84）、佐波甫（1901-71）、富永惣一（1902-80）や小説家である高見順（1907-65）、大佛次郎（1897-1973）、コレクターである福島繁太郎（1895-1960）、石橋正二郎（1889-1976）、長谷川仁（1897-1976、日動画廊）、爲永清司（1931-、後のギャラリーためなが創設者）、報道や出版関係者の扇谷正造（1913-92）、そのほか知人というよりは来客として細田徳寿大分県知事（1904-91）や実業家なども佐藤を訪ねている。佐藤は彼らのフランス案内役を務めることで、ときには日本での作品販売や展覧会出品につなげている。

### おわりに

ここまで、1950年代の佐藤敬についてその制作と交友をみてきた。戦後の佐藤は、すでに日本ではある程度その名前を知られる洋画家であった。しかし、佐藤はそこに甘んじることなく、画家としてフランスで活躍することを目指し、まだ戦後早い時期に渡欧した。1950年代は、なかなか画室を借りられず、金策に苦悩する様子がうかがわれる苦しい時期ではあったものの、画風を意欲的に展開させ、2回目の個展を開催した。また、同時に現地の画家や画商との交友関係も広げていった。このようなことを通して、フランスで画家として活躍するための足場を固めた時期としてとらえることができる。

### 【参考文献】

- ・座右宝刊行会編『現代日本美術全集 第9巻』1956年、角川書店
- ・大分県立芸術会館『佐藤敬とその周辺展』1999年
- ・大分市美術館『佐藤敬展：特別展 生誕100周年記念：新たな創造を求めて・ピカソとの出会い』2006年

### 【画像】

- ・佐藤敬《裸婦》（1952年、73×91cm、大分市美術館蔵）
- ・佐藤敬《赤いノートルダム》（1952年、73×61cm、神奈川県立近



代美術館)、大分県立芸術会館『佐藤敬とその周辺展』(1999年)

・佐藤敬《静物》(1954年、33×41 cm)、大分県立芸術会館『佐藤敬とその周辺展』(1999年)

・佐藤敬《パンチュール》(1955年、90.9×116.7 cm)、座右宝刊行会編『現代日本美術全集 第9巻』1956年、角川書店、90頁

・佐藤敬《切線》(1956年、146×116 cm、大分県立美術館)、大分県立芸術会館『佐藤敬とその周辺展』(1999年)

# 資料 1



Combat : organe du Mouvement de libération française, 1954 年 1 月 18 日号

佐藤敬のフランスでの初個展の際に、新聞に掲載された佐藤敬の紹介文。

フランス国立図書館電子図書館ガリカ蔵 (パブリック・ドメイン)

source gallica.bnf.fr/BnF



【年表1】 中欧、南仏、アフリカ取材旅行

西暦	和暦	月日	主なできごと	
1952	昭和27	4月末	羽田を出発	17日消印 美子宛葉書
		5月	ローマ、トルコ、ギリシャ、ローマを周る	佐藤敬『遙かなる時間の抽象』（アドバンス大分、1979年）
		5月30日	パリに到着	『遙かなる時間の抽象』
		7月ごろ	南仏へ	『遙かなる時間の抽象』
		9月	サン・ポール・ヴァンス教会でマチスの作品を見る パピエ・コレに取り組むマチスを訪問 ヴァロリスのピカソを訪ね、1951年に日本で開催されたピカソ展のカタログなどを渡す アンチーブのピカソ美術館を訪問 イタリアへと渡りヴェネツィアビエンナーレを鑑賞 ニースに戻りピカソを再度訪問	9月消印 美子宛手紙、10月9日消印 美子宛手紙、『遙かなる時間の抽象』
		10月17日	ニースから四時間かけてチュニスに到着	10月17日消印 美子宛手紙
		10月25日	アルジェリアに到着	10月25日消印 美子宛手紙
		10月26日	ブサアアイに到着	10月26日消印 美子宛手紙
		11月1日	モロッコのカサブランカに滞在	11月1日消印 美子宛手紙
		11月3日	ラバ（モロッコの首都）に滞在	11月4日消印 美子宛手紙
		11月6日	フェーズにて「本当のモロッコに来た感じ たくさん絵が描けそう」と美子へ手紙	11月消印 美子宛手紙
		11月12日	マラケシュに滞在	11月11日消印 美子宛手紙 ※なぜか消印より後の日付
		11月14日	マラケシュからカサブランカに戻る	11月消印 美子宛手紙
		11月21日	パリに帰る	11月21日消印 亜土真弓宛葉書 3 9 rue pierre nicole paris 5e

## 【年表2】佐藤敬の1950年代略年表

西暦	和暦	主なできごと
1952	昭和27	朝日新聞の特派員として渡欧し、パリに到着（5月31日）、ピカソやマチスを訪ねる（9月）、アフリカ旅行（チュニジア、アルジェリア、モロッコをめぐる）（10月17日～11月）
		【展覧会】 第2回秀作美術展（三越、日本橋、《子供の時間》）/第15回新制作展大分巡回展（トキハデパート、大分）/第1回日本国際美術展（東京都美術館、《裸婦》《森》）/カーネギー国際美術展国内展示（神奈川県立近代美術館、《栗とまりも》）
1953	昭和28	日本から来客対応で多忙（3～4月）、亜土宛に西洋画家を一人ずつ紹介するハガキを出す（6月～）、オランダ旅行（6月初旬）、宮田重雄氏とブルターニュで過ごす サン・マロ、ヴィル・クローズ、ポンタヴァンを訪問（8月）
		【展覧会】
1954	昭和29	ミラドル画廊での個展を盛況に開催（1月14日～30日）、ヴェネツィア・ヴィエンナーレ鑑賞（秋） この頃より画室について検討、また経済問題を解決するために、美子にパリに来る人を紹介してもらい案内を受け作品購入へとつながっている
		【展覧会】 個展（ミラドル画廊、フランス）/在仏佐藤敬作品展（東京画廊）/パリの日本人画家展（レヴァクレーゼン市立美術館、ドイツ）
1955	昭和30	フェノサの紹介でルーアン美術館の館長（ユベール・ギレ）が絵を見に来て、小品二点の現代画家展出品が決まる（3月中旬）、三岸節子・黄太郎親子とスペイン旅行（3月26日～4月17日）、アトリエを引っ越す（7月）
		【展覧会】 第6回秀作美術展（三越、日本橋、《セーヌ河》）/パリの日本人画家展（3月ごろ）/現代画家展（ルーアン美術館）/サロン・ド・メ展（パリ、《パンチュール》）/在仏外国人作家展（プティ・パレ）
1956	昭和31	年末に母から心配する手紙を受け、帰国を検討する。
		【展覧会】 佐藤敬フランス風景作品展（東京画廊）/サロン・ド・メ展（パリ、《切線》）/第20回新制作協会展（東京都美術館、《作品A》《作品B》《作品C》）/国際美術家展（パリ市近代美術館）
1957	昭和32	今泉篤男とフランスの新進美術批評家ミッシェル・ラゴンが対談し、その通訳をつとめる（5月）、ドイツ旅行（8月）、関口、金山、風間、田淵と新制作の人々12人が集まって愉快地過ごす（クリスマス） 展覧会出品作の抽象化にともない、販売用の作品の画風に悩む。
		【展覧会】 サロン・ド・メ展（パリ、《潜在》）/現代美術10年の傑作展（東横、渋谷、《赤いノートルダム》）/第21回新制作協会展（東京都美術館）に水彩《白い月》《金の月》《青い月》/在仏日本人画家展（セルクル・ヴォルネ、パリ）/プティフォルマ展（マッソール画廊）/カラー彫刻・版画ビエンナーレ（イタリア）
1958	昭和33	高見順、伊藤整とベルギー旅行（5月頃）、大佛次郎とローマ滞在（7月中旬）、南仏のカシスにあるマッソールの夏の家に招待されて半月ばかり海水浴や釣りをして過ごす（8月頃）
		【展覧会】 土橋醇一、佐藤敬、田淵安一、並木の4人展（マッソール画廊）/グループ展（ギャラリー・ドゥーズ）/サロン・ド・メ展（パリ、《大地凝結》）/第22回新制作協会展（東京都美術館、《夜の門》《黒い序説》《Temps des Visions》）/プレミオ・リソーネ（イタリア）/今日の作家たち展（ミュゼ・サンリス）/日本の作家展（ミュゼ・ガレリア）/分岐（Divergences）展（アルノー画廊、パリ）
1959	昭和34	フェノサがヴァルセロナに大きな家を買ったので夏をスペインで過ごす このころより販売用の作品も抽象度を高める
		【展覧会】 在巴里日本人画家展覧会（名古屋市）/個展（ジャック・マッソール画廊、パリ）/サロン・コンパレーゾン（パリ市立近代美術館）/サロン・ド・メ展（パリ）/プレミオ・リソーネ展（ミラノ、イタリア）/日本書道展（ジャネット・オスティーユ画廊、パリ）/第23回新制作協会展（東京都美術館、《朝の生》《昼の生》《夜の生》）/今日の絵画展（地中海パレス、ニース）
参考文献：大分市美術館『佐藤敬展：特別展 生誕100周年記念：新たな創造を求めて・ピカソとの出会い』（2006年）、大分県立芸術会館『佐藤敬とその周辺展』（1999年）、大分市美術館所蔵佐藤敬関連資料（1950年代）、横浜市史編纂室所蔵佐藤美子関連資料（1950年代）		

## 【年表3】 展覧会出品

西暦	和暦	主なできごと
1952	昭和27	第2回秀作美術展（三越、日本橋、《子供の時間》）/第15回新制作展大分巡回展（トキハデパート、大分）/第1回日本国際美術展（東京都美術館、《裸婦》《森》）/カーネギー国際美術展国内展示（神奈川県立近代美術館、《栗とまりも》）
1953	昭和28	未確認
1954	昭和29	個展（ミラドル画廊、フランス、《ノートルダム（バラ色）》、《ノートルダム（灰色）》、《椅子》、《モロッコにて》、《静物》、《風車》、《モロッコ人》、《海洋》、《モロッコの貌》、《若い女》、《風景（A）》、《風景（B）》、《影の反映》、《色とブドウのある静物》、《梨のある静物》、《裸体》、《構成》、《花》、《窓》）/在仏佐藤敬作品展（東京画廊、《Reflet d'ombre》《Paysage》《L'atelier de Picasso》《Sur la Plage》《Nature morte》《Horloge》《Le Port（St Malo）》《La Seine》《Figure》《L'église》《Nature morte》《Pont-Neut》《Glace》《Fenetre》《Nu》《Tour de St Jaque》《Versailles》）/パリの日本人画家展（レヴァクーズ市立美術館、ドイツ）
1955	昭和30	第6回秀作美術展（三越、日本橋、《セーヌ河》）/パリの日本人画家展（3月ごろ）/現代画家展（ルーアン美術館）/サロン・ド・メ展（パリ、《パンチュール》）/在仏外国人作家展（プティ・パレ）
1956	昭和31	佐藤敬フランス風景作品展（東京画廊）/サロン・ド・メ展（パリ、《切線》）/第20回新制作協会展（東京都美術館、《作品A》《作品B》《作品C》）/国際美術家展（パリ市近代美術館）
1957	昭和32	サロン・ド・メ展（パリ、《潜在》）/現代美術10年の傑作展（東横、渋谷、《赤いノートルダム》）/第21回新制作協会展（東京都美術館）に水彩《白い月》《金の月》《青い月》/在仏日本人画家展（セルクル・ヴォルネ、パリ）/プティフォルマ展（マッソール画廊）/カラー彫刻・版画ビエンナーレ（イタリア）
1958	昭和33	土橋醇一、佐藤敬、田淵安一、並木の4人展（マッソール画廊）/グループ展（ギャラリー・ドゥーズ）/サロン・ド・メ展（パリ、《大地凝結》）/第22回新制作協会展（東京都美術館、《夜の門》《黒い序説》《Temps des Visions》）/プレミオ・リソーネ（イタリア）/今日の作家たち展（ミュゼ・サンリス）/日本の作家展（ミュゼ・ガレリア）/分岐（Divergences）展（アルノー画廊、パリ）
1959	昭和34	在巴里日本人画家展覧会（名古屋市）/個展（ジャック・マッソール画廊、パリ）/サロン・コンパレーゾン（パリ市立近代美術館）/サロン・ド・メ展（パリ）/プレミオ・リソーネ展（ミラノ、イタリア）/日本書道展（ジャネット・オスティーユ画廊、パリ）/第23回新制作協会展（東京都美術館、《朝の生》《昼の生》《夜の生》）/今日の絵画展（地中海パレス、ニース）
<p>参考文献：大分市美術館『佐藤敬展：特別展 生誕100周年記念：新たな創造を求めて・ピカソとの出会い』（2006年）、大分県立芸術会館『佐藤敬とその周辺展』（1999年）、大分市美術館所蔵佐藤敬関連資料（1950年代）、横浜市史編纂室所蔵佐藤美子関連資料（1950年代）</p>		

## 【年表4】三岸節子とスペイン旅行

1955（昭和30）年、佐藤敬は三岸節子とともに三岸の息子・黄太郎の運転でスペインを旅行した。道中、ラスコーの洞窟画を鑑賞したほかスペインでは闘牛やグレコの《オルガス伯の埋葬》を鑑賞している。旅行から帰った後のサロン・ド・メには、闘牛を主題とした作品を出品しており、この旅が発想源となったことがわかる。

西暦	和暦	月日	主なできごと
1955	昭和30	3月初旬	三岸母子からスペイン旅行に誘われ、経済的な問題が解決すれば行きたいと美子に手紙
		3月19日	経済的な面について、解決の目途がついたので、スペイン旅行へ行くことにしたことを美子に報告 帰ってきたら一文無しになると、送金を依頼 今度の旅行は車で移動するため、旅費の節約になること、フランスに滞在し続けるために朝日新聞に絵と原稿を送る必要がありその取材を兼ねることなど美子に手紙
		3月26日	朝、ルーアンへ 自分の作品が展示されている現代画家展（ルーアン美術館）をみる（フェノザ夫妻も同行） 南へ行き、ベルネイに一泊
		3月27日	ポアティエに到着 ローマ時代の遺跡、初期ゴシック寺院（ポワティエ大聖堂か？）、サン・サヴァン・シュル・ガルタンブ修道院附属教会のフレスコ壁画を見物
			さらに南下して、リモージュに入るも、ゼネストにあってホテルも取れず ブリーヴ＝ラ＝ガイヤルドでホテルをみつける
			ラスコーの岩窟に見に行く 「この洞窟画は紀元前15000年ここにある　それが硝子状に結晶している　牛、鳥、鹿などが白い岩肌にも黒、青、赤茶で素朴な形と色が芸術の根源を示している」 戦争中（1939年か）、藤田、猪熊両氏が逃避したレ・ゼイジのオテル・ル・クロ・マニオンにて中食 両氏の話のホテルのマダムから聞く　この日はトゥルーズ泊まり
		3月30日	夜、スペインに入り、バルセロナでフェノザの友達に案内されて夜遅くホテルに到着 フェノザやクラーベからの紹介で現地の画家や彫刻家と交流し、三岸節子の和服姿がスペインの芸術家たちの好奇心をそそる パコと呼ばれて人気のある闘牛士（Fanesco corpas）を見物 裏街にあるラ・マルカレーナという店でフラメンコを見物 カタルーニャ美術館でローマゴシック絵画を見物 三夜をここで過ごして南へ
		4月1日 ～	ヴァレンシアに到着 南の海岸アリカンテに泊りを重ねて大望のグラナダに着いたのが丁度パック（復活祭、スペイン語でスメナ・サンタ）に当たりたいへんな人出の中をホテルローマに到着して神聖行列を見物 行列がにぎやかで、朝の3時まで寝られず、それが翌日も翌日もつづくので部屋を変えてもらう アルハンブラの宮殿を見物して、グラナダからセビリアに
		4月8日 ～	セビリアに到着 復活祭で、黒いマンティージャ姿の婦人たちが教会の前を歩き来している様子や「スメナ・サンタ」（復活行列）を見物し、 カルメンの故郷に来たと感想 セビリアからコルドバを見てトレドへ
			トレドに到着 グレコの家や、サン・トメ教会にあるグレコの代表作《オルガス伯のマイソウ》を鑑賞 3日間滞在して、マドリッドに向かう
			マドリッドの日本大使・渋沢新一氏の奥さんが美子をよく知っているとのことでご馳走になる プラドのゴヤ、ベラスケス、グレコなどを鑑賞　特にゴヤは生き生きとした面を感じると感想 マドリッドに3泊滞在し、サンセバスチャン、ベアリッツ、ボルドー、オルレアン、アングレームを経てパリに戻る
		4月17日	パリに戻り、サロン・ド・メに出品する作品を闘牛をモチーフに描きはじめる
参考文献：大分市美術館『佐藤敬展：特別展 生誕100周年記念：新たな創造を求めて・ピカソとの出会い』（2006年）、大分県立芸術会館『佐藤敬とその周辺展』（1999年）、大分市美術館所蔵佐藤敬関連資料（1950年代）、横浜市史編纂室所蔵佐藤美子関連資料（1950年代）			